

本学経営学部・経営研究所主催

《経営を考えるシンポジウム 2011 秋》

「震災下の企業経営」開催

大震災で大きな打撃を受けた産業の復興策を考えるシンポジウム「震災下の企業経営—東北の観光業と自動車産業の危機管理と復興への途—」が、十月一日、土樋キャンパス・押川記念ホールで開催された。

(本文)

第一部で「観光業」、第二部で「自動車部品製造業」をとりあげ、震災当初から現場で陣頭指揮にあたった企業幹部が、被災当時の対応、復興の現状、直面する課題などについて報告した。

「観光業」非常時の旅館の役割

第一部では、自ら被災しながらも避難住民の受け入れなど様々な緊急対応を行った旅館の女将が講演した。

宮城県松島町の「ホテル松島大観荘」の磯田悠子氏は、「旅館は避難所など地域コミュニティの役割を果たせることを実感した」と語った。観光客を呼び戻そうと「東北全体が元気で安全であることを「おかみ会」でアピールしているが苦戦している」と今後への危機感を募らせる。

南三陸町の「南三陸ホテル観洋」の阿部憲子氏は「すべて助け合いと工夫で乗り切った」と当時を振り返り、「今回の災害を風化させないように、被災地の正しい現状を多くの人たちに見てほしい。」と語った。「被災地は人口流出を止めるためにも、新しく町を作り上げていかななくてはならない。旅館として何ができるか模索し続けている」と復興への覚悟をにじませた。

講演を受けて、司会を務める同学部齋藤善行教授は、非常時に人々を受け入れた旅館の社会的役割を高く評価。今

後予想される旅館へのニーズの変化などについても話し合われた。

「自動車産業」の危機管理

第二部では、宮城県山元町の自動車部品メーカー「岩機ダイカスト工業」の横山廣人常務が、現場での復旧活動やサプライチェーン寸断の問題を語った。

同社では停電で主要原材料であるアルミの溶解炉、保持炉がすべて使えなくなり、復旧までに二週間を要した。

同社社長は「わが社の責任で組立てメーカーのラインを止めるわけにはいかない」と供給責任を最優先に据えて顧客への金型返還を決断。それは「自社のノウハウをすべて開示することになる苦渋の決断だった」とあかした。震災後は非常用発電機を増設。通信手段の整備も進めた。

業績は主に海外向け生産によって九月には前年比同に回復したが、自動車販売量の低下や円高、海外メーカーとの競争激化など先行きは予断を許さない。しかし「ノウハウを海外に流出させない」「開発と生産現場は一緒にあるべき」との考えから、海外シフトはしないとの考えを示した。

報告後、同学部の折橋伸哉教授と村山貴俊教授が実態調査に基づいて、リスク分散や災害に強い体制づくりなど、競争力構築についての提言があった。

参加した多くの学生や一般市民は真剣に聞き入っていた。